

# 森林生態

森林生態と種多様性維持（講義）

樹木実習（現地）

日時：平成26年8月31日（日） 10:00～15:00

講師：山本 進一（岡山大学 副学長）

## 概況



### 第1限 森林生態と種多様性維持（講義）

樹木は針葉樹と広葉樹、常緑樹と落葉樹、軟材と硬材に分けられる。樹木の外部形態は高木・低木・つるに分けられ、それぞれ樹冠・葉群と枝・幹・根から成り、樹冠は円形・長楕円形・傘状・円錐形・断続形・しだれ型に分けられる。葉は複葉と単葉に分けられ、複葉はさらに羽状複葉・二回羽状複葉・三出複葉・二回三出複葉・掌状複葉・鳥足状複葉に分けられる。枝は大枝・枝・一年生枝・当年枝に分けられ、芽は花芽と葉芽・混芽に分けられる。幹は単一幹・複数幹・萌芽幹に分けられる。

「森」と「林」の違いは、森は大集団、複層型で自然にできたもの、林は小集団、単層型で人工的なものを指し、学術用語や合成語にはほとんど「林」が使われる。

日本の森林植生は、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）、冷温帯落葉広葉樹林（夏緑樹林）、亜寒帯（亜高山）針葉樹林、中間温帯林、針広混交林が分布している。

暖温帯常緑広葉樹林は、シイやカシなど常緑性の樹木が主となる森で、沖縄「やんばる」の森、長崎県対馬竜良山、奈良県春日山、東京都三宅島・御蔵島、宮崎県綾町などが代表的である。冬の寒さに適応してクチクラ層が発達し、テカテカと光る厚い葉を持つ。

冷温帯落葉広葉樹林は、ブナ林・ナラ林などであり、ブナは樹齢40年以上で開花・結実を開始し、5～6年に1度豊作年が来る。これは捕食者の極端な増加を防いでいる。

亜寒帯常緑針葉樹林はトドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、ダケカンバなど、亜高山帯針葉樹林はシラビソ、オオシラビソ、コメツガ、トウヒ、カラマツ、ダケカンバなどが主要構成樹種である。

また、熱帯林樹木の特徴や非木材林産物、愛知県の潜在植生、人工林と雑木林の比較や樹種の特徴、カシノナガキクイムシによるナラ枯れなども紹介された

## 第2限 樹木実習(現地)

吉田川沿いの林道において、樹木実習がなされた。ニワウルシ、アカメガシワ、ツブラジイ、ヌルデ、ヤマウルシ、ムラサキシキブ、エゴノキ、ヒサカキ、イヌシデ、ヤブツバキ、サカキ、タカノツメ、リョウブ、アカマツ、クロモジ、アラカシ、アベマキ、コナラ、クサギ、ヤマボウシ、アセビ、コバノミツバツツジ、アズキナシ等についてそれぞれの特徴や用途などの解説がなされた。

その後センターに戻り、総括がなされた。